

秋の研究発表会の振り返り

第5学年社会科

「海とつながる人々の暮らし」
—持続可能な漁業を目指して—

授業者 西川 恭矢

本実践の主張点

外部人材とのかかわりや調査活動を単元に位置づけることで、自己調整における「気付く」場面が充実し、問題解決に向けて自ら学び続ける姿が見られるであろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの自己調整

本実践における授業づくりの「しかけ」

- ・問題解決に取り組む外部人材との出会い
 - ・必要な情報を得るための調査活動
- ⇒密度の濃い情動が発生し、多くの場面で自己調整を発揮しながら学習を展開できる

本実践では、「自ら学び続ける子どもの育成」を実現するために、知識の形成に至る認知的な論理的側面だけでなく、密度の濃い情動の発生という非認知的な情動的側面を単元の学習活動に位置づけた。よりよい漁業を目指して問題解決に取り組む人々との出会いやそれぞれの問題意識に基づいた調査活動を通して、様々な場面で自ら学びに向かう子どもたちの姿が見られた。

・和歌山の漁業は大丈夫？プロジェクトスタート

スーパーの広告を使った調査活動を通して、自分たちにとって身近な和歌山県でも多くの種類の魚がとれていることに気付いた子どもたちは、「和歌山の漁業についてもっと詳しく知りたい」という思いをもった。そこで、県振興局の方をお招きし、和歌山の漁業の現状などについて教えていただく時間を設定した。その中で、和歌山県の

漁獲量が全国32位であることを知った子どもたちは、和歌山の漁業に対する危機感を抱いた。



休み時間も、振興局の方に疑問に思ったことを積極的に質問する子どもの姿が見られた。

* 授業後の振り返り

振興局の人の話を聞いて、海を守る活動や漁師を支える活動があることがわかりました。～中略～ 農林水産業の全てで後継者が減少しているようです。昔では7000人ほどいた漁師が今は2400人まで減っているそうです。私もこれからの水産業を守っていけるように積極的に活動に参加したいです。(N児)

N児以外にも9名の子どもが「漁業を守るための活動がしたい」という言葉を記していた。実際に問題解決に取り組む人の生の声を聞くことで、和歌山の漁業に対する危機感をもち、自分たちにできることを考える姿につながったと考える。

私は自給率の低下に漁業の問題が関係していると思います。～中略～ 和歌山の漁業を守るために3つのことをすればいいと思いました。一つ目は、骨が嫌で魚を食べる人が減っているのを、寿司や刺身をアピールする。2つ目は、後継ぎの減少を止めるために私たちの世代が「漁師の仕事は楽しい」と思えるようにアピールする。3つ目は、環境を守る。環境の悪化によって日本の漁業がピンチになっています。この問題を解決するためには、呼びかけが大切だと思いました。(R児)

R 児（叔父が漁師ということもあり、漁業の学習における問題意識が高かったようである）は、和歌山の漁業を守り続けていくために必要な取り組みとして「①魚食離れを防ぐ②後継ぎ問題の解決③環境の保全」を挙げている。N 児や R 児の振り返りをもとに『5B 和歌山の漁業 守り続けるプロジェクト』がスタートした。

・失礼のないように依頼したい！国語科との関連

全体で学習計画について考える中、プロジェクトを達成するために、「実際に漁業に携わる方」「海的环境について危機意識をもつ方」に出会う必要があることが確認された。ここで子どもたちの学びの主体性を高めるために、「ゲストティーチャーへの依頼は自分たちです」というしかけを行った。子どもたちからは、「どんなことを教えてもらいたいかははっきりしておいた方がいい。」「いつ来てもらうかも決めておく必要がある。」「失礼のないようにきちんとした言葉遣いで話さなければならない。」等の意見が出された。そこで、ゲストティーチャーの方に何を教えてもらいたいかを確認する話し合いがもたれた。子どもたちは、これまでの自分たちの学びを省察し、より問題意識をもって、ゲストティーチャーの方と出会う準備を進めることができた。また、「失礼のないようにきちんとした言葉遣いで依頼する」を達成するために、国語科「敬語」の授業では、「KさんやNさんにきちんとした言葉で依頼できるよう敬語を学ぼう。」という学習問題が設定された。子どもたちにとって、学ぶ必要性を感じにくい敬語の学習であるが、「ゲストティーチャーの方に失礼のないように依頼したい」という思いが伴った学習であったため、使うべき敬語について真剣に議論する姿が見られた。

後日、漁師の方が来校された際、「丁寧に話してくれて嬉しかったです。みんなの敬語は素敵です。」という評価をいただいた。子どもたちも「敬語」で話すことの良さを実感できていたようである。



ゲストティーチャーへの依頼のために必然性をもって「敬語」を学ぶことができた。

・漁師さんはすごい！漁師 K さんとの出会い

一本釣り漁業に携わる K さんは、代々続く漁師の家系で生まれ、自身も 16 歳から漁師として海に出ている。授業では 40 年以上、和歌山の海で漁業を続けてきた経験から感じたことやこれからの漁業への思いを「本音」で語ってくださった。K さんの話を聞く子どもたちの表情は真剣そのもので、普段、論理的な学びを得意とする子どもからも「やっぱり人っているんな思いをもって仕事しているんや。」という声が聞かれた。



K さんが実際に魚をさばく様子をタブレットで撮影し、「これがプロの技」というタイトルで家庭学習を行う子どもの姿も見られた。

* 授業後の振り返り

一番心に残っているのは K さんが、釣ってきた魚をさばいてくれたことです。なぜならテレビとかの企画でやっているのは何回も見たことがあったけれど、生で見たことがなかったからです。魚をさばいてくれた時に、豆知識みたいなことをたくさん教えてくれました。それは「さっき釣った魚より、1～2日魚を泳がせた方がおいしい」ということです。なるほどと思ったので、スーパーとかに行ったらこの知識を生かしていきたいと思いました。今日は、K さんが来てくれてとても勉強になりました。そして、私ももっと海を大切にしようと思いました。(U 児)

「一番心に残っているのは」という表現から、K さんとの出会いが情動を伴う学びであったことが読み取れる。また、「私ももっと海を大切にしようと思いました」という表現からは、問題解決に向けて本気で取り組んでいる人に影響を受け、自身の生き方につなげようとする姿がうかがえる。

K さんの話を聞いて、漁業は自分たちとつながっているのだと思いました。よくよく考えてみると、環境問題も後継ぎ問題も自分たちとかかわっていると思いました。なので、海に漁に行っている漁師さんに「がんばれ」という声をかけるかわりに、漁業の問題を自分たちで解決していく。自分たちで漁を支えていくことが大切だと思いました。そんなことを思いながら、後継ぎ問題の解決策を考えました。これも漁業の支えになるとうれしいです。(K 児)

K 児は、K さんとの出会いを通して、漁業の問題を「自分とかかわりのある問題」として捉えることができている。K 児の学びは、まさに社会科が目標とする「自分事として社会的事象を捉え、考える姿」である。出会いを通して、心が動いたからこそその「自分事の学び」であると考えられる。

・ 授業外でも自ら学びはじめる子どもたち

本学級では「自分から進んで学んでいく力を身に着ける」ことを目的として、4月から探究ノートに取り組んでいる。(週末に自分の気になるテーマについて調べ、考えたことや感じたことをふり返る。朝の会等で、それぞれの探究を発表し合い、感想を伝え合っている。)

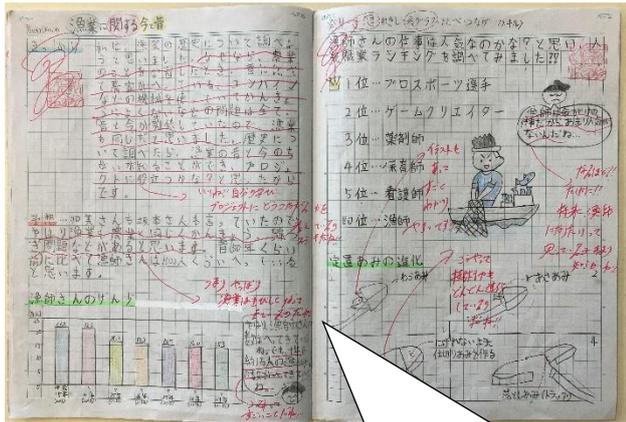


それぞれの探究を発表し合い、意見を伝え合う。ここでの交流が次の探究テーマを見つけるきっかけになることもある。また、最近はタブレットを使用し、動画資料等も活用しながら発表する姿も見られるようになってきている。

「5B 和歌山の漁業守り続けるプロジェクト」がスタートして以来、この探究ノートを活用して漁業についてのそれぞれの疑問について考えてく子どもが増えた。「漁師の年収 一体いくら？」

「漁業と環境問題のつながり」「苦手な魚をおいしく食べるには？」等テーマは多岐にわたり、授業と授業の「間」を生かした学びが見られた。

さらに、論理的な学びが苦手な普段は積極的に学びに参加できない H 児が家庭で魚食離れを止めるためのポスターを作成してきた。H 児にその理由を尋ねると「K さんとか海でがんばっている人たちを何とかするためにがんばりたかったから」という答えが返ってきた。このような姿が見られたのも人と出会い、人の思いを聞くことで、学びが自分事になったからこそであると考えられる。



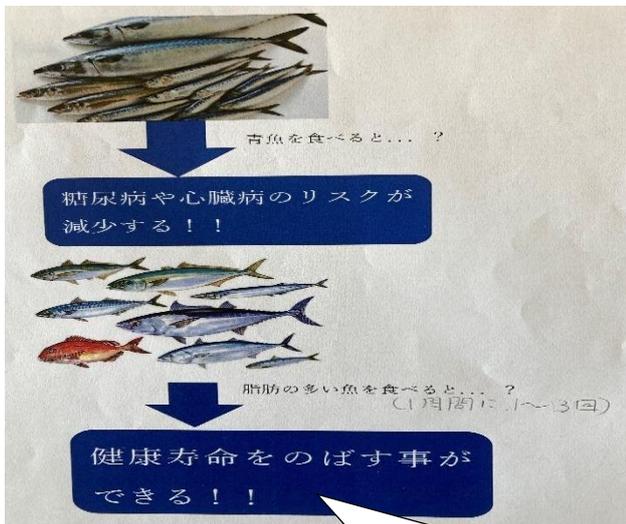
M 児は、探究テーマ設定の理由について、「漁業の昔と今のちがいをすることでプロジェクトに役立つ」を挙げている。クラス全体で取り組む学習の解決のために自分に何ができるかを考え、テーマを決める姿からは、自己調整を發揮しながら学びに取り組む姿が見受けられる。また、この他にも環境問題に関わるゲストティーチャーの仕事（栽培魚魚）について事前に調べ、聞いてみたいことを整理する学びや魚が食卓に並ばない理由を母親にインタビューする子どもの姿が見られた。

・本当の豊かさとは？Nさんとの出会い

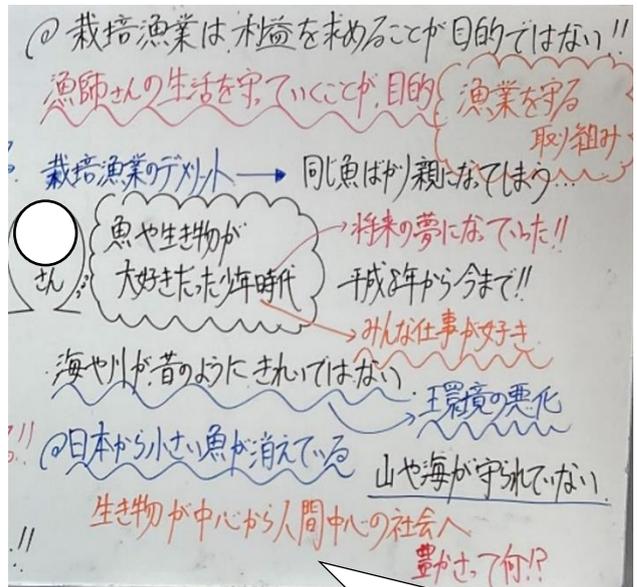
栽培漁業センターで働く N さんは、センターでの取り組みだけでなく、ここ数年肌で感じている海の変化についてもお話しくださった。N さんの話から人々の便利さと引き換えに海の環境が悪化していることを知った子どもたちは、自分たちの生活の在り方についても考えを深めていった。



N さんは、センターで栽培しているアワビも持参してくださった。本物のアワビに触れた子どもたちは夢中になって学びを進めていった。



H 児が作成したポスターの一部である。はじめは、手書きで進めていたが、作成していく段階で「できるだけ多くの人に伝えたい」という思いをもち、タブレットを使って複数のポスターを作成することにしたようである。



N さんは「あくまで個人の意見ですが・・・」と前置きをした後、海の変化を本音で語ってくださった。子どもたちからは、「人間が求めている豊かさって何？」という声も聞かれた。

※授業後の振り返り

私は N さんの話を聞いて、自然を守ることは何かを考えました。私は、その答えは「本当の豊かさを取り戻す」ということだと思えます。ここでいう本当の豊かさとは、生き物中心の世界のことです。今は、人間中心の社会により、自然が守られていないと感じています。これは、私たちが便利を求めすぎた結果だと思えます。自分たちでやってしまったことは、自分たちでもとに戻そうではないかと思えます。でも、1人の力じゃ無理なので、今こそみんなで力を合わせるときだと思えました。(A 児)

社会科は、社会の在り方について理解させることはもちろん、人間としての生き方についても深く考えさせる教科である。A 児は、N さんとの出会いを通して、自然と共生する生き方について考えを深めることができている。また、「自分たちで・・・」や「みんなで力を合わせる・・・」といった記述からは、海の環境の悪化を自分事と捉え、問題解決のためにできることを考えている様子が見受けられる。N さんの「本音」に触れることで、密度の濃い情動が発生したと評価している。この学習後、A 児は3回にわたって海の環境問題について探究ノートへまとめ、多くの知識を獲得していった。情動を伴う学びが原動力となり、教師が指導しなくとも自ら知識を獲得していく姿が見られたのである。このような学びの姿こそ、本実践で目指す「自ら学び続ける子ども」の姿である。

今日ぼくは、N さんにいろいろなことを教えてもらいました。中でも N さんが仕事を始めた理由が心に残っています。魚や生き物が大好きだった少年時代から、魚に関する仕事が将来の夢になっていたそうです。でも昔とちがって、海がきれいではなくなっているということを知りました。ぼくも環境について対策をしないとダメだと思えました。(T 児)

ほとんどの子どもが N さんの授業を通して一番心に残ったこととして、「海の環境問題」を挙げていたに対し、K 児は「N さんが仕事を始めた理由」が一番心に残っていると記している。T 児は、N さんと出会いを通して、様々な職業に興味をもち、その仕事に携わる人々の思いについて迫る探究をスタートさせた。探究ノートを発表する際は、「いろんな仕事があるけど、みんなその仕事に対して思いがある。それは一緒のこと。」と発言する姿も見られた。T 児も A 児同様、人との出会いをきっかけとして、自身の生き方（職業観）について考えを深めることができている。

令和の教育として個別最適な学びが挙げられているが、当然ながら同じ学習をしてもそれぞれが感じることは違いがある。このような「違い」が「伝える必然」「聞く必然」につながり、協働的な学びをより豊かなものにしていくと考える。実際、お互いの発表を聞き合った子どもからは「自分にはそういう考えはなかったから、考えを広げるためにもやっぱり伝え合うって大切だと思う」といった声が数多く聞かれるようになり、他者と協働することの「良さ」を実感しながら学びに向かう姿が見られるようになってきている。

2. 本時における「しかけ」と子どもの自己調整

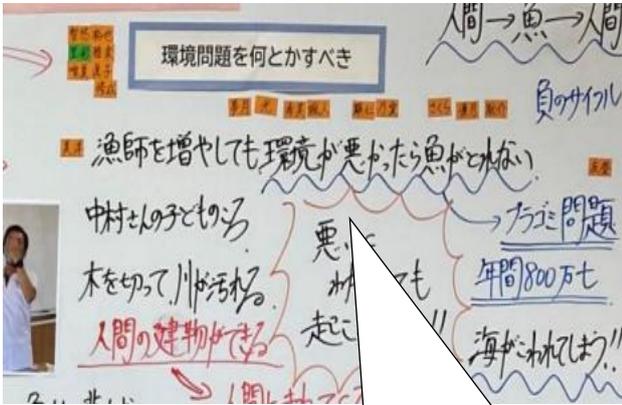
本時では、互いの立場を明確にした話し合い活動をとおして、「持続可能な漁業のためには自分自身が主体となって諸問題と関わっていく必要があることを実感させる」ことを学習のゴールと設定し、以下2つのしかけを行った。

本時における授業づくりの「しかけ」

- ①それぞれの考えの違いを可視化する
- ②書く活動をとおして、本時における学習の深まりを自覚させる

子どもたちが話し合い活動をとおして学びを深めていくためには、話し合いの必然性を感じる必要がある。これまでの学びをとおして自分らしい

考えをつくってきた子どもたちの意見を、思考ツールを使って表現させることで、それぞれの考えが可視化され、共通点や違いを明確にした。



本時では、和歌山の漁業を守り続けるプロジェクトを達成するために、「①消費者の減少を何とかすべき②後継ぎ問題を何とかすべき③環境問題を何とかすべき」のうちどの取り組みが大切かを話し合った。子どもたちは、本時までにそれぞれの取り組みの優先順位をランキング形式で表している。本時では、自分が1位にランキングした項目に、名前カードを置くところから学習をスタートさせた。

それぞれの考えが可視化されたため、授業前半に取り入れたペア・グループ学習では「自分と同じ意見をもつ仲間と話し合うことでより考えを深める子ども」「自分とは違う意見もち仲間と話し合うことで、考えを広げる子ども」など話し合う相手を自分で取捨選択し、学びに向かう姿が見られた。また、この段階で自分の考えに変化が生まれ、意見を変える子どもの姿も見られた。このような姿は、他者との協働を通し自己調整が働いた姿であると考えられる。

授業の終末には学習問題に対する考えを書かせる時間を設定した。単元や本時の学習をとおして学んだことを振り返り、自分のことばで表現させることで、これまでの思考や解決プロセスをモニタリングし、リフレクションすることができると考えたからである。以下に3人の子どもの授業前

後の学びの変容について示す。

☆前時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくは「環境・後継ぎ・消費者」から「消費者・環境・後継ぎ」に変わりました。理由は、今回の魚離れ調査でかなり魚離れが進んでいると感じたからです。この魚離れは止められるならいいけど、とめるのはかなり難しいと思います。今は、魚よりもおいしいと食べ物を食べる人が増えているからです。



★本時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくはこのプロジェクトを成功するためには、いままでにこんなことをした人を調べたり聞いたりしてヒントをもらえばいいと思います。いなかったらこのことを全員でしっかり考えてみたらいいと思います。理由は、プロジェクトについて「きれいごとだ」とか「無理だ」と思っている人がいるから、そうではなくできないかしっかり考えることが大切だと思ったからです。NさんとKさんの思いも足して考えたらもっと深まるかも・・・(S児)

前時では、魚離れを止めることが一番大切としつつも、「とめるのはかなり難しい」と記しているが、本時の振り返りには、「きれいごとだとか無理だと思っている人がいるから、そうではなくできないかしっかり考えることが大切」というプロジェクト成功への思いが記されている。

S児は、情動的側面の学びではなく、論理的側面の学びを得意とする子どもである。道徳科でも常に合理的に物事を判断し、伝統産業を取り扱った学習では、「利益が出ない伝統を無理して続けていく理由が分からない」と発言した。しかし、「NさんKさんの思いも足して考えたらもっと深まるかも・・・」という振り返りからは、漁業に本気で向き合う人との出会いを通して情動的側面の学びを豊かにしていることが読み取れる。

また、S児の「今までこんなことをした人を調

べたり聞いたりしてヒントをもらえばいいと思います。」という記述をもとに、学級全体で持続可能な取り組みの成功事例について調べる活動がスタートしていった。

☆前時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくは「後継ぎ・環境・消費者」で前とは変わりました。なぜなら漁師がいなくなると魚すら食べれなくなるし、海に魚がいなくなっても魚が食べられないからです。そしてなぜ食べる人の減少を最後にしたかという食べ人が少なくなっても魚が食べれる。アンケートをしたけど魚が好きな人が意外といたので最後にしました。



★本時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくは研究授業をして思ったことが2つありました。1つ1つずつやっていくとだめなんじゃないかということです。なぜなら環境問題をよくしても漁師がこんどはいなくなる。でも漁師が増えるときには食べる人がいなくなる。だから一つずつは無理なんじゃないか。だから3つを少しずつしていけばなおるかなと思って、その理由は何人も人が必要だからです。だってたった一人がやったとしても変わりません。10人でも100人でも和歌山の人、全員くらいいないと達成できない。もしできたとしてもリバウンドしてしまったらまた一から。だから本当に守り続けていくのは難しいんじゃないかなと思いました。だからこそ世界を変えるのは大変と言われているんだなと思えました。でも、世界を変えるために考えていきたいと思えます。(Y児)

前時では、魚食離れが漁師の減少につながること（漁師の収入が減少数するため）が理解できていないが、本時の振り返りでは、「3つを少しずつしていけばなおるかなと思って・・・」と記していることから分かる通り、すべてつながりの

ある問題であることに気付くことができている。また「だからこそ世界を変えるのは大変と言われているんだなと思えました。でも、世界を変えるために考えていきたいと思えます。」という記述からは、大変なことがあるがそれに立ち向かい状況を変えていきたいという思いが伝わってくる。このような姿も問題を自分事として捉えている姿であると評価している。

Y児は、授業中に全体で一度も発表していない。研究発表会に向けた動画編集時にも一見すると仲間の発表を聞いていないようなそぶりも見られた。しかし、振り返りの記述からは、仲間の発表を受け自分の考えを再構成している様子が見受けられる。このような学びの事実から、あらためて目にうつる姿だけで子どもを評価することの危うさを実感することができた。

☆前時（プロジェクトで一番大切なことは？）

私は、前と変わって全部大切だけど①の魚を食べる人の減少問題をなんとかしなくてはと思いました。環境が昔のようになって意味なくはないけど魚を食べる人を増やせたり漁師を増やせたりするわけではないと思うからです。もちろん環境はいいほうがいいけど、後継ぎ問題・環境問題が解決しないとプロジェクトができないからです。なのでこの順番です。



★本時（プロジェクトで一番大切なことは？）

私はプロジェクトが達成できるかわかりません。なぜかというHちゃんがポスターをつくっているのはすごくいいことだけど、ふつう道を歩いているときのポスターがあっても見てる人が少ないと思うからです。だけど海も守りたい、漁業も守りたいけど5Bだけのみんながやってもそこまで意味がない。だからきれいなごとなのかなと思いました。けれどももちろん漁業を守り続けたいと思えます。だからポスターより影響力があることをしたらいいと思うけどそんなないかなと思う。

M 児は、プロジェクト開始当初から、問題を自分事と捉え、自分たちにできることを積極的に行っていく必要性を訴えてきた。また、「全部大切だけど・・・」という記述からは、それぞれの取り組みのつながりについても理解していることが読み取れる。しかし、本時の振り返りでは、「私はプロジェクトが達成できるかわかりません」や「だけど海も守りたい、漁業も守りたいけど5Bだけのみんながやってもそこまで意味がない。だからきれいごとなのかなと思いました。」という記述が見られる。一見すると、前向きな思いが変化したように思える振り返りであるが、M 児は5Bプロジェクトを教室だけで完結する学びではなく、実社会に働きかける学びにしたからこそ、その難しさを実感し、問題についてより深く考えを巡らせていると評価している。

実際、M 児は授業終了後すぐに担任のもとをおとずれ「参観しに来てくれた大人の人達に聞きたいことがあります。聞きにいてもいいですか？」と許可を求めてきた。(あいにく、先生方もその後の予定があったため、すぐに教室を後にしたため、聞きたいことは聞けずじまいになってしまった。) M 児は教室にいた数名の大人に「漁業の未来について本気で考えている大人はどれくらいいますか？」と質問をしたかったようである。先ほどのY 児同様、本気で世界を変えたいからこそ、世界は簡単には変えられないことを実感し、自分たちのできることをより深く考えている姿である。「なかなか変えることが難しい社会を変えるために自分はどのように社会とかかわっていくか。」このような思いこそが主体的に社会的事象について学び続ける原動力になると考える。

3. まとめ

本時において子どもたちが本当に話し合いたかったことは、「どの取り組みが大切か」(授業者は、どの取り組みが大切かを話し合わせることで、すべての取り組みが大切であることに気付か

せ、漁業衰退の問題を自分事として捉えさせることをねらいとした)ではなく、「5Bプロジェクトを本当に実現することができるのか」ということであった。授業の中盤にI 児の発言を受け、子どもたちの学びが能動的になる姿が見られた。それは、I 児の発言が「本音」だったからこそであると考えられる。



I 児は、「水の勉強したときもそのときは使えすぎたらあかんとかって注意してるけど、家帰ったらお母さんとかずっと出しっぱなしにしてんねん。大人は絶対そういうこと気にしてないと思う。」という『本音』を語った。この発言をきっかけに、「持続可能ってよく言われてるけど実際にやっている人はごく一部の人だけ」「漁業を守る取り組みも実際、忙しくて関係ない人は誰もやらないと思う。」といった子どもたちの『本音』が次々と語られていった。

自ら学び続けるための学習を展開していくためには、このような子どもたちの「本音」が欠かせないと考えられる。なぜなら「本音」には、学びを主体的にする力があるからである。今回の実践で本音が語られた理由として、人との出会いや調査活動等を通して密度の濃い情動が発生したことが挙げられるのではないだろうか。現在もプロジェクトの達成のために取り組みを進めている子どもたちからは、「もう一度2人に会って話を聞かなければ、本当に伝えていくべきことが分からない。」「もっと多くの人の思いも知りたい。」といった声があがっている。今後も自ら学び続ける子どもを育成していくために、情動のストーリーを構想していくようにしたい。